講　演

エジプトを生きるイスラーム教徒とキリスト教徒

――2011年エジプト「1月25日革命」までの歩み――

大　稔　哲　也

1．はじめに

最初に，簡単な自己紹介をさせていただきます。私は最近もっぱらエジプトを研究上のフィールドにしておりまして，1年間のうちの必ずどこかで，エジプトに住むか通っているということを24年間続けています。どうでも良いことでしょうが，私にとっては重要で，とにかく自らに課して，這ってでもエジプトに通い続けています。今年（2011年）はすでに3月と8月に仕事で滞在していましたが，また今月（10月）からもっと長期に住むつもりです。

ここではエジプトといっていますが，とりわけカイロ市内のオールド・カイロという地区がその場所です。コプト・キリスト教の教会が林立する地区として名が通っていますが，現在は地区の大半が現地でいう庶民街，外国人のいうスラムと化しています。私の心の故郷は思春期を過ごした北海道ですが，24年間も通っていますので，第二の故郷はオールド・カイロです。

庶民街に暮らすとはどういうことなのか，最初に例をご紹介したいと思います。庶民街のパン焼き窯では，毎朝，パンを求める行列ができていました。エイシュという名の，平たく丸い伝統的なパンです。周囲は黒づくめの女性がほとんどで，ずっとワイワイ言い合いながら待っています。しかし，1時間経ってもなかなか番が回ってこない。それゆえ騒然とした雰囲気になるのですが，ふと，前にいた女性が私の方を振り返って，驚愕するわけです。なんでこんな外見の人間がどこからかやって来

て，オールド・カイロでパンを買おうとしているのか。「あんたは日本からパンを買いに来たのかい？」と問われて，そうだと答えると，「ほら，日本からパンを買いにきたのがいるよ！」と，みんなに大声を掛けました。すると皆驚いてワァっと振り向き，その瞬間だけすっと目前に隙間が開いた。すかさず，「ほら行きな」とばかりに背を押され，先頭にしてくれた。このように，弱者同士の助け合いが見られるのも庶民街でした。

もう一つ言うと，庶民街の人間関係というのは非常に密です。私の第一の親友にW君がいますが，そこではひとたび親友となったら，毎日訪ね合うべきだとされていました。そのためW君は，用がなくても私の家に常にやってくる。最初は話題もあるのですが，次第にそれも尽きてきて，「トイレを直してあげよう」とか，「水道が壊れているんじゃないか」などと到来の理由を探す状態になっていました。私は，その当時は一応，文部省派遣の留学生でしたので，本も読みたいし，勉強もしたい。あるとき，ついに居留守を使って本を読んでいました。そこで，夜だったのですが，彼は裏山に登って，山頂から私のアパートを覗いたのです。すると光がついているのが見えた。すぐさま，駆け降りてきて，ドンドンと戸を叩き，涙を流しているんですね，「君はひどい人だ」と言って。私は本当に悔いて謝り，その後また約 2 年間毎日のように付き合いました。このように，非常に人間関係が濃密なところです。その地区は，水や電気も不足しがちで，水は週の半分くらいしか来ていませんでした。

最初にお断りしておきますが，私自身はキリスト教，特にその教義の専門家ではありません。しかし，エジプトを中心とする中東のムスリム(ムスリムというのはイスラーム教徒の意味です)社会において，いかにして他の信徒たちが共存してきたか，ということを研究テーマの一つにしてきました。そして，私自身コプト・キリスト教徒の友人が大勢いて，彼らと暮らした経験もあり，また各地で行なわれる彼らの聖人生誕祭には 30 回以上行きましたし，結婚式にも多く参列してきました。

そのため，この講演の目的は，エジプトのキリスト教徒であるコプトについて知っていただき，彼らがエジプト社会の中でどのように共存してきたのかを，歴史的に伝えることです。そしてさらに，コプト社会の現況，もっと言いますと，エジプトの通称「1 月 25 日革命」── 彼らはこのように呼んでおり，日本では「アラブの春」の一部として知られる

── を経て，この共存の枠組みはどういうことになるのか，ということについても言及したいと思います。もちろん，エジプトにはメリキト派などコプト以外のキリスト教徒やユダヤ教徒などのマイノリティーも存在してきましたが，本日の話はその中の多数派であるコプトに焦点を当てます。

二つだけ用語について確認させていただきたいのですが，一つ目は，イスラーム教徒を，普通我々はアラビア語に基づいて「ムスリム」と言いますので，「ムスリム」という言葉を使わせていただきます。これは欧米諸語でも，発音は変わるかもしれませんが，普通に使われる単語です。

もう一つは，この講演の中で使う「アラブ」という言葉です。皆様よくアラブという言葉を耳にされると思いますが，実際何がアラブなのかというふうに考えると，様々なレベルの用法が混在していて，非常に難しい問題を多くはらんでいます。今回，私がお話するコプト・キリスト教徒という人たちは，現在アラビア語を母語にしていて，そしてアラブ文化に親しんでいる人たちです。それに加えて，場面に応じてときに自分たちを「アラブ」だと称することがある人たちです。ですから，「アラブ」といったときは，ムスリムとイコールではありません。

この問題をさらに突き詰めてゆくと，識者によっては，「アラブ・ジュウ」などと呼ばれる人たちを含めて考える場合もあります。アラビア語を話し，アラブ文化に親しみながら，ユダヤ教の信仰を守りつつ歴史的パレスチナなどに暮らす人々です。このようにアラブ人という範疇は難しさをはらんでいますが，はっきりしていることは，この講演でいう「アラブ」とはイスラーム教徒以外も含むかたちで用いるということ。ムスリムもいれば，キリスト教徒もいれば…，ということです。

では，初めにこの写真をご覧下さい[写真１]。ここに写っている建物について，ちょっとご意見を伺いたいのですが。さきほどコプト建築についてご質問下さった方，いかがでしょう。(返答)「ドームはイスラーム教の寺院で，塔は祈りの塔？」

実のところ，これはイランのエスファハーンという都市にあるアルメニア教会です。このドームも教会建築の一部です。向う側には鐘楼があり，その脇にはアルメニア人虐殺についての博物館があります。このように，なかなか外観だけからでは判別できないような形で共存している

写真 1

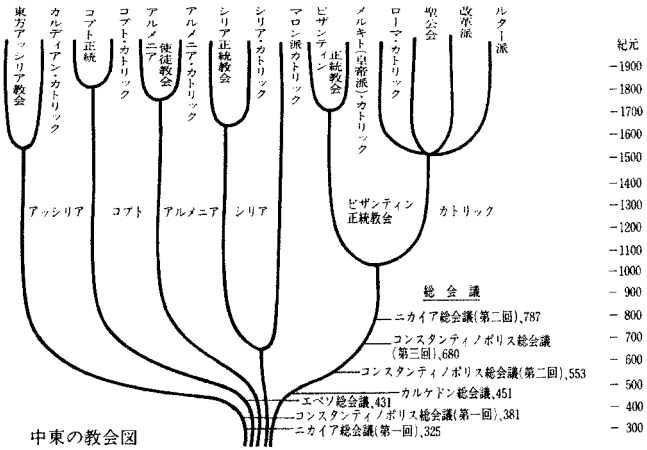
わけですが，そもそもイスラームのモスクも翻って考えると，形状についての指示が『クルアーン（コーラン)』の中にあるわけではありません。

次に，これは中東に残存している様々な教会の系譜を示した図ですが[写真２]，ここで問題としたいのは，これらの間にどういう違いがあるかということではなく，これだけの様々な種類の教会が中東に残ってきた事由です。つまりなぜ残ったのか，というのが私の設定する問いです。先取りしてお伝えしておきますと，それが残ったのはムスリム社会において曲がりなりにもある種の庇護を与えられたからだ，ということだと思います。

これはまた全く異なる写真です[写真３]。写っているのはマリア像ですが，これは中東のレバノンです。いらした方もおられるようですが，世界遺産にレバノン杉の森が登録されている一帯へ至る街道筋には，道祖神のようなマリア像が数百メートルごとに置かれています。そして，それを寄進した人物の名がアラビア語で刻み込まれている。この地区は，特にマロン派キリスト教徒が多いとされるのですが，このような光景が延々と連なってゆく。

そして，ダマスクスの旧市街で会食をして，ビールを片手に私と歓談しているこの青年［写真略］の名前はジハード君といいます。怖い名前でしょうか？　でもこのジハード君，そんなに怖い人なら，ビールなど

写真 2



中東の教会図

（出典『中東キリスト教の歴史』日本基督教団出版局，14 頁より）

写真 3

写真 4

飲んでいて良いのでしょうか？

このジハード君，実はシリア正教徒のキリスト教徒です。しかし，アラビア語を母語としていて，ジハードという名前です。「ジハード」というのは，「聖戦」などと訳されがちですが，もともとアラビア語では「奮闘努力する」などという意味です。ですから彼の名前は，字義通りに見れば，努君とか，克己君というような名前に過ぎないことになりましょう。しかし，ジハードということで，彼には入国するのに大変な苦労を伴う国があります。キリスト教徒であってもです。

こちらは，エジプトに現存するユダヤ教徒の墓地です[写真 4]。エジプト国家が厳重に警備していますので，少なくとも革命前までは，入ろうとするとすぐ取り押さえられたものです。

2．コプト・キリスト教徒

それではここで，コプト・キリスト教徒について概観してみたいと思います。彼らはかつてエジプトがキリスト教徒の国であったときから現在に至るまで，連綿と教えを継承してきた人々です。現在は人口の 6 ～ 12％程度に減少したと推定されています。この 6 ％という数字は国の公式の統計値であり，12％という数字はコプト側の発表する公式な数字です。ということは，実数はその間にあるのかと予測されます。しかし，

エジプトの総人口を例えば8500万人以上と考えると，それ自体が相当な数字です。独立国家を持っても不思議でない数であり，中東最大のキリスト教宗派です。

彼らは，エジプトこそキリスト教の本場の一つであって，欧米などに比べれば自分たちのほうが遥か昔からキリスト教を護ってきたという自負を有しています。そして，エジプトが発祥の地とされるキリスト教の制度・慣行として，一般に知られているものに修道制などがあります。キリスト教史の様々な研究書を見ても，大方，修道制の始まりはエジプトの西方砂漠やシリアと書かれていると思います。

日本でもなじみの深いコプト・キリスト教関係の人といいますと，ちょっとこじつけになるかもしれませんが，アルピニストの野口健さんは，母方がコプト・キリスト教徒の家系をたどれるとのことです。お父さんは日本の外交官だった方ですが。また，かつて国連に「ガリ」という名の事務総長がいたことを記憶しておられる方もいることでしょう。奇妙な名前だと思われたかもしれませんが，これはもともとアラビア語で，ブトルス・ガーリーという人です。彼はエジプトで著名なコプトの家系の出で，国連トップまでのぼりつめたわけです。現在は日本人のコプト・キリスト教司祭という方もいるらしいので，状況はずいぶん変ってきております。そういう方と話すのが，宗教自体を知るには一番良いのでしょう。

さて，「コプト」という言葉は，ギリシア語でコプトのことをアイギュプトスと呼んだことに由来すると言われています。現在カイロにアレキサンドリア総主教座を戴く人たちであり，総主教はシェヌーダ3世という80歳を超えた方です（2012年3月死去。葬儀に参列しました）。実は，彼はカイロ大学の前身であるフアード一世大学文学部歴史学科の卒業生であり，つまり私の留学先の先輩にあたります。そのため，一度ご挨拶に伺った折に，そのことを伝えることができました。今からもう23年前で，今より随分とお元気だった頃です。

エジプトのキリスト教は，使徒マルコによって伝えられたとされております。しかし，7世紀からムスリムの支配下に入っていますので，コプトの歴史の多くの期間は，ムスリムの統治下で継続したことになります。コプト語についていいますと，ある意味で古代からのエジプト語を

継承していると考えられています。コプト文字もあります。しかし，エジプトにおけるコプト語は恐らく遅くとも 11〜14 世紀の間に，支配的な日常言語の地位をアラビア語に譲ってゆきます。特に都市部や下エジプト地方でのアラビア語化は，そのイスラーム化に比べて随分すみやかに進行しました。この点は，同じくイスラーム化したもののアラビア語化せず，ペルシア語を保持し続けたペルシア（イラン）と好対照をなしています。

エジプトにおける古代ファラオ，古代王朝時代の文化は，キリスト教の時代になって，かなり徹底的に破壊されたと言われています。その破壊の程度というのは，ファラオ時代からキリスト教の時代になったときの方が，キリスト教からイスラームの時代になったときよりも激しかったと一般に考えられています。もちろん，それは貫徹されたわけではなく，様々なところに残滓が紛れ込んでゆきますが。

そして，コプトはコプト暦という独自の太陽暦を持っています。彼らは多数の殉教者を出した西暦 284 年をコプト元年としています。ご存じとも思いますが，イスラームの方は月の満ち欠けによる太陰暦です。そうしますと，一年が 365 日に約 11 日位ずつ不足して繰り上がってゆくため，農事や科学的現象の説明などに不都合をきたします。そのため，エジプトでは未だにこのコプト暦が重宝される場面があります。もちろん，西暦も使われています。

そして，歴史を振り返ると，西暦 451 年のカルケドン公会議における神学論争のなかで，キリストの単性論を主張していたアレキサンドリア派は，両性論，すなわちキリストが神と人との両性の一致・結合であるが両性の区別は存在するとしたアンティオキア派 ── アンティオキアは現在トルコ領になっています ── との論争に破れたために，ビザンツ帝国教会から「異端」の烙印を押されます。ただ，異端と呼ばれただけで，自分たちは「オーソドックス，正統」と称してきました。このことは，ごく近年までローマ教皇との間でずっとわだかまりとして残ってきました。

その後，イスラームがエジプトに入ってきたとき，どのようにそれを受容したのか，という話はかなり込み入っています。その端緒について言いますと，当時，同じキリスト教のビザンツ・ローマ支配による弾圧

に耐えかねていたエジプトのキリスト教徒たちは，むしろ，新たにやってきたアラブ・イスラーム軍，これをある程度選択して受け入れたという方が依然として通説で，これを覆すに十分な論証はなされていません。つまり，人頭税を払い，庇護民として契約のもとに入れば，むしろ一定の安寧と信仰が保証されると考えた当時のエジプトのキリスト教徒たちは，自らある程度選択してこのアラブ・イスラーム軍の方に傾いた，というように言われています。

そして，ムスリムの諸王朝による支配のもとで，特にコプトにとって厳しかった時代の一つは，いわゆる十字軍 ── 中東側は当時「十字軍」という概念を知らず，単にフランク人，フランクと呼んでいましたし，ヨーロッパにおいても十字軍という用語が定着したのはずっと後代のことですが ── が侵攻を始めた時代や，その後のマムルーク朝期であったと想定されています。

いかに困難であったかという点について付言すると，エジプトで共に生活するムスリムから内通の疑念をかけられたり，白い眼で見られるだけではなく，十字軍からも差別される，という言わば二重の差別が生じました。彼らコプトの『総主教史』という有名な史料がありますが，そこにはこう言った内容が記されています。

1099 年，ビザンツとフランク ── いわゆる十字軍 ── が，エルサレムとその領域を奪った。そのため我々コプト・キリスト教徒のコミュニティーは，エルサレム巡礼ができなくなってしまった。そして，エルサレムに近づくことすらできなくなってしまった。これは，彼らが我々に抱く憎しみと偏見，十字軍が我々コプトを不信仰者だと見なすためである，と。

そうするとコプトは王朝政府に援助を求めることになります。というのも，イスラーム勢力のもとで，彼らには巡礼が一定の保証をされていたためです。たとえば，この後のマムルーク朝期 ── 13〜16 世紀にかけてですが ──，キリスト教徒の修道士，修道女は，通行税が免除されていたと言います。

マムルーク朝期は，非ムスリムであるキリスト教徒やユダヤ教徒に対するムスリム民衆や一部知識人に煽動された暴動がしばしば発生し，非ムスリムにとって大変過酷な時期を含む時代であったことがしばしば指

摘されてきました。同時期に多くのコプト聖人伝が編み足されたことは注目に値するもので，これは厳しい状況に抗して暮らすコプト信徒のための信仰の支えとして供されたものであったと推測されます。もっと現実的な側面としては，恐らくは聖人の奇蹟を多く含む聖人伝の集積によって列聖化をすすめてゆく，という意図もあったのかも知れないと私は永らく推測してきましたが，そのように結論するにはコプトにおける列聖化の成立時期を確定させる作業が必要でしょう。

コプトの居住地区について言えば，今も昔もイスラーム教徒とかなり混住しています。場合によっては，同じ建物の１階がコプト，２階がムスリムというように，階によって違うとか部屋によって違うとかいうことすら起きています。ですから，よくイスラミック・カイロなどという言い方をしますが，そのようなところにも必ずといっていいほどキリスト教徒が住んでいます。たとえば，イスラームの総本山と見なされ，ときに世界最古の大学として言及されるアズハル学院・モスクですが，実はそのすぐ裏に旧いキリスト教教会が現存しています。カイロでキリスト教徒の住めない地区を探すのは難しいのですが，あえて住んでいないところを探すと，唯一，イスラーム教徒の墓地区には住んでいないと断言できます。現在，カイロのムスリム墓地には 150 万人が居住していると言われ，社会問題化していますが，さすがにキリスト教徒がその墓に住むことはないと思います。もちろん，ショブラ地区の一部のように，カイロ市内にはキリスト教徒がより集住する地区もあります。

それから「本家意識」について言えば，エジプトのムスリムに対しては，自分たちの方が，古代よりキリスト教徒内で通婚してきたために，より古代エジプト人の血筋を直接に引いているのだ，というプライドがあります。

現在の彼らは，同時に「エジプト国民」としての強い意識を持っています。この点で，ムスリムとナショナル・アイデンティティを共有しています。19 世紀半ばに，先述の人頭税が廃止されますが，人頭税が廃止されるとどういうことになるかというと，庇護されない代わりに兵役につかなければいけない。つまり，それまでは兵役が免除され，イスラーム教徒の「庇護」に入る代わりに人頭税を払う，という論理のもとにあったわけですが，このときからは「庇護」の関係の外へ出ることになりま

す。こうして現在，キリスト教徒も等しく兵役についています。

この人頭税というのは，とりわけ欧米に現在でもインパクトを残しているようです。例年，４月１日になると，「エジプトで人頭税復活」というようなデマ報道をよく見かけます。これはエイプリル・フールによる悪意ある中傷ですが，そういうものが４月１日になると浮上してくる。

今日，コプト・キリスト教徒の日常生活は，ムスリムのそれと非常に似通ってきています。しかし同時に，差異も残っています。例えば，結婚や葬儀，埋葬の仕方，断食 ── コプト・キリスト教徒も独自の断食をします ──，そして教会活動や祝祭日などが違います。厳密に言えば，アラビア語で初対面のときの挨拶なども元来は異なっていました。肌の露出に対する感覚なども，おそらく微妙に違うのではないかと推測されます。

ただ，一人ひとりのコプトとムスリムを並べて，たとえばここに連れてきて，どちらがどの宗教でしょうかと問うても，なかなかわからないと思います。しかし，50 人ずつ並べたら，何となく雰囲気が違い，わかります。

人によっては，名前で判る場合もあります。たとえば先程の元国連事務総長ガーリー氏は，「ブトルス」という名ですが，これはペテロを意味しますので，キリスト教徒であることは明白です。あるいは逆に，イエス･キリストの「イエス」── アラビア語では「イーサー」となります ── という名前をつけている人，これはイスラーム教徒だと判ります。コプト・キリスト教徒で自分をイエスと名乗るような人はいません。しかし，イスラーム教徒はイエスも預言者の一人として敬っているので，「イーサー（イエス）」という名の人がいるわけです。「モーゼ」という人もいます。今回，革命後のエジプト新大統領選に立候補を予定しているムーサー元外相のムーサーは，「モーゼ」の意味です。

それから，後でビデオをお見せしますが，しばしば右手の手首の内側に，十字架の刺青を入れます。これは自由意志で入れています。あるいは，近親や友人の助言による場合もあるでしょう。いずれにしても，ムスリムに強いられているわけではまったくありません。公立学校における教育についても，ムスリムとコプトでは若干違っています。宗教の時間などには，クラスが分かれると聞きました。

彼らのネットワークの核になるのは，やはり教会です。彼らは教会で洗礼を受け，日曜学校に通い，友人を見つけ，そこで彼女も見つけるかも知れない。そして中庭で遊び，教会で穫れたナツメヤシの実を食し，結婚式を行う。また，聖人生誕祭や葬儀も執り行われる。そういうような，あらゆる類いの想い出が凝縮される場所です。

ちなみに，コプトのクリスマスは１月７日です。ですから，クリスマス・イブというのは１月６日夜であり，皆さんの中でもコプトのクリスマスに参加された方がいるかと思いますが，１月６日の夜にエジプトを訪ねられると，クリスマス・イブの雰囲気を味わえます。近年は，その前後になるとエジプトのイスラーム教徒からも，「メリー･クリスマス＆ハッピー・ニューイヤー」などと声をかけられるようになってきました。メリー・クリスマスとハッピー・ニューイヤーが一緒くたになって，20日間ぐらいずっとショーウィンドーに書かれ続ける，という大らかな状況が生まれています。

コプト・キリスト教徒といっても，その実態は非常に多様でありまして，中には大富豪もいます。有名なサウィールス一族などですが，彼らは『フォーブス』誌の世界の富豪番付に載るようなエジプト一の大富豪です。特に，その中のナギーブ・サウィールスという人物は，独立系新聞や民放テレビ局など色々なメディア設立に介在しており，実は今回の革命でも，広い意味で陰の担い手の一人だと思われます。非常にスケールの大きな仕掛け人で，軍にも顔がきく大変な有力者であることは間違いありません。実際のところ，ムバーラク前大統領一族との関わりも否が応でも相当深かったはずです。この一族は，スイスの村ごと観光開発のために買い占めたり，ギリシアのテレコミニケーションを整備したりしています。エジプトが北朝鮮に携帯のネットワークを広げようとして，結局は撤退したという事件がありましたが，それは全部このサウィールス一族の事業です。

それから海外への展開についてはあとでまたお話しますが，ここでご紹介するのは，日本の村山盛忠牧師の話です。以前，『コプト社会に暮らす』という岩波新書を書かれた方であり，エジプトへ日本人の牧師として派遣された人物です。牧師は，アメリカンミッション米国長老派教会宣教師団のすすめによって，日本基督教団海外伝道委員会（その後の世

界宣教協力委員会）から 1964-68 年にエジプトへ産業伝道に派遣されています。背景には，「日本とエジプトは共に東洋に属するのだから，（中東を植民地化した）西欧人よりも（エジプト社会に）溶け込みやすいはずだ」という眼差しがあったようです。このミッションはイスラーム教徒に対する布教を早くから断念し，実際にはコプト・キリスト教徒をプロテスタントへ「改宗」させる事業に専念していました。その村山牧師はあるとき，コプトの一人にこう訊かれた。「聞けば，日本のキリスト教徒の数は１％にも足りないとのことだが，エジプトには長い歴史を持つキリスト教はすでに存在しているし，その信徒数も 10%以上になる。あなたは（我々コプトに布教するよりも）まず自分の国で伝道すべきではないのですか」というような内容です。村山牧師は，この問いかけを真摯に受け止め，そののち日本の現実に向き合おうとされてきた方です。現在も中東関連のことで活躍しておられ，現地とつながりをもっておられると仄聞しています。

３．ムスリム諸政権下のコプト史

次に，ムスリム王朝支配下のコプトの在り方を歴史的に振り返ってみたいと思います。「西暦 6 世紀にキリスト教徒であった者の子孫の大半はムスリムである」。回りくどい言い方で申し訳ありませんが，6 世紀のころキリスト教徒がどのくらいの地域で支配的であったか，という地図を思い描いていただけますでしょうか。これは，その領域が現在はほとんどイスラーム化していることを指摘した米国人学者の発言です。むしろ，その領域外のところが現在，キリスト教徒主体の国になっています。このように，イスラームというのは，キリスト教徒からの改宗者を非常に多く含んでいる宗教です。

エジプトに関していうと，『イスラーム百科辞典』のコプトの項目をひきますと，エジプト人のイスラーム教徒の 92%はコプト・キリスト教徒からの改宗者である，と書いてあります。この数字の是非はともかく，そのくらい多いと理解すれば良いのでしょう。

実に長い時間をかけて，ゆっくりこの改宗が進行してきました。おおよそのピークは 854 年～63 年を最大のものとして，975～76 年，990～98

年,そして最後の大量改宗は 1293〜1354 年ごろであろうと推測されています。しかし，たとえば 10 世紀ぐらいのエジプト全体というのを現実に思い浮かべてみると,実のところまだ相当数は,キリスト教徒ではなかったのかと，私は推測しています。特に上エジプトの農村部には，コプト・キリスト教徒がまだ非常に多く残っていたのではないかと推察されます。

また，いずれにせよ，キリスト教からの大量の改宗者流入は，ムスリム社会やその文化へも多大な影響を与えたのではないかと，想定してきました。

この改宗の理由というのを歴史的に史料から推量するのはなかなか難しいのですけれども，以下のような様々な事柄が指摘されています。例えば，農村社会における徴税権が，コプトの領主からムスリムの徴税官へ移ったという点。あるいは結婚を機縁にムスリムへ改宗するというケースも多かったことでしょう。イスラーム教徒の女性と結婚したいがために，非ムスリムの男性がイスラーム教徒へ改宗する。そうすると，生まれた子供はイスラーム側からすると全てイスラーム教徒ということになります。現在，日本でイスラーム教徒が増えている中で，最も多いパターンはこれです。もちろん，現在の日本でも様々な改宗理由が認められますが。

それから，ムスリム勢力は非ムスリムの協力も得て当時の最先端の科学を有していましたし，荘厳な建築物，宗教施設，学院，それから様々なインフラ，病院，スーフィー修道場そういったものを備えていて，また，大掛かりな祭礼や儀礼，というようないわば文明・文化の力によって優位を示した，というような側面もみられます。ただし，もっと単純に，人頭税から逃れたかったというような理由も（教会や共同体による補塡が想定できたとしても）議論されてはいます。

マムルーク朝のある時期のように，ムスリム以外を排斥しようとする社会風潮の圧力を受けたうえに，ムスリムによる支配が動かない現実に絶望して，というような理由も挙げられましょう。

エジプトの官僚，特に財務の官僚というのは，歴史的に見るとキリスト教徒が非常に有力でした。現在に至っても，金融関連や国の財政・税制部門はキリスト教徒の有力な分野です。歴史的には，特殊な財務・税務の計算法などを家系内で相伝するなどしてきました。さらに，キリス

ト教徒やユダヤ教徒であっても，宰相にまで昇りつめた例があります。しかし，特にマムルーク朝期以降は，地位の保全や昇進に不利になったため，キリスト教徒官僚がムスリムへ改宗する事例も急増します。

そして，犯罪者が恩赦の見返りに改宗したケースも見られますが，これはイスラーム法的には問題を含んでいましょう。大小の集団の長が改宗したために，部下もみな改宗したという例もあります。史料によると，たとえばあるヤクザの親分が改宗したため，手下が全部改宗してしまったとか，あるいはある農村の長が改宗したら，その村が全部改宗してしまったとか，そのような事例が史料に出てきます。

また，ムスリム側の史料では，現世や来世における御利益につながるようなムスリムの聖者の奇蹟や徳行に感化されて改宗した，というような例話もよく出てきます。

この他にも様々な理由が挙げられますが，しばしば指摘されるのは，『クルアーン（コーラン）』のアラビア語自体が音を含めて非常に強力であり，ときに呪術的な力を発揮して，それに絡めとられるというか，それに打たれて改宗する，という側面です。加えて，イスラームのシンプルな論理の力というような部分も，往々にして指摘されるところです。この問題は特に，キリスト教の宣教団が中東各地に布教に入ったときにぶつかった大きな障壁としても指摘されます。つまり，イスラームの場合，一神教という点を非常に強調し，神をより絶対唯一化するかたちで，先行の諸宗教と自分たちを差異化してきたと思われます。その論理はシンプル，かつ明快で，一般信徒でも説明ができる。そして，ムスリムの側はキリスト教の三位一体への論駁を，それこそ『クルアーン』の中から現在までずっと繰り返してきている。これは，キリスト教徒の側から見れば誤解にすぎない，ということになるのでしょうが。

しかし，現実にイスラーム教徒をキリスト教に改宗させようとする宣教団にとっては，非常に厳しい現実があったということが自らの手で記録されています。アメリカン・リフォームド・ダッチ・チャーチ・ミッションという団体が 1889 年からアラビア半島でずっと布教をしていたのですが，ほぼ失敗に終わりました。その宣教師たちの書簡集が残されていますが，それによるとキリスト教の贖罪の観念とキリストにおける神の性質については特に伝道が難しく，宣教師による三位一体の説明は

ムスリムの庶民にことごとく論駁されたとあります。そして，キリスト教における信仰体系の議論の複雑さが潜在的改宗者を遠ざけている，とも述懐しています。ある宣教師に至っては，彼らイスラーム教徒の論理を非難することはできない，とまで心情を吐露しています。

この点に関連して，ムスリムがキリスト教を受け付けなかった理由は，イスラームがポスト・キリスト教の宗教である点に求めるべきとする分析もなされています。これについては様々な見解があり得ましょう。

なお，アレクサンドリアで実際にユダヤ教からムスリムへ改宗したサイード・ブン・ハサンと言う人物が，自らの改宗理由を 1326 年に記した史料も残されています。彼は病臥したおりに，近所に住む友人のムスリムのことを思い浮かべ，彼に助けを乞うて，それがきっかけになってモスクに入り，整然たるムスリムの礼拝の様子に雷に打たれたように改宗してしまった，というようなことを記しています。

ちなみに，「宣教」ということについて言いますと，イスラームの側からは歴史的に宣教ということはあまり主題にされてきませんでした。稀にムスリム同士その内部への「宣教」が実践されたことは知られています。逆に，ムスリム社会に対してキリスト教側から宣教されてきたという，受身に問題設定されがちであり，これは歴史的事実とも符合します。実のところ，元来イスラーム側には基本的に異教徒への宣教の組織や，それを記した記録もほぼありません。異教徒に対する専門的な宣教師はいませんでした。しかし，近代になって，キリスト教宣教師団が続々と到来する中で危機を覚えたイスラーム教徒たちが，自分たちもそれに対応する組織をつくらなければならないということで，その組織を真似た宣教団を作り始めました。現在，このようなキリスト教宣教団を真似て，近代にインド・パキスタンなどから始まったイスラームの宣教団の一部が，日本に来ることもあります。

４．ムスリム社会における諸宗教共存の根拠と実態

次に，このようなイスラーム教徒のもとで，諸宗教が共存する根拠は何なのか考えてみたいのですが，それはつまるところ，イスラームの教義そのもの，あるいは『クルアーン』や『ハディース（預言者ムハンマ

ドの言行録)』へと逢着します。

例えば，イスラームの六信五行といわれるものがありますが，これはイスラーム教徒であれば誰もが信じるべき 6 つの事柄と，行うべき 5 つの事柄を指します。信仰告白，礼拝，メッカ巡礼，断食なども含まれていますが，その中に必ず預言者と啓典の問題が入ってきます。そこで重要なのは，イスラームにとっての預言者とはムハンマド（マホメット）だけでなく，それ以前に数多(あまた)いたと考えられている点です。その中にはイエスもいれば，モーゼもいる。そして，数多くいた預言者の中で，最後の預言者がムハンマドである，という考え方です。そこには，ノアの方舟で知られるノアや，人類の祖とされるアダムがいたりする。こういった存在もみなイスラームでは預言者として認められています。そして，それぞれの預言者には，各々啓典が神からくだされた，とする考えです。したがって，キリスト教徒も，神からの啓示を授かったイエスに従う，啓典をいただく人たちである，「啓典の民」として守らなければならない存在，ということになります。

以下，『クルアーン』の中で，特にこの異教徒との共存に関連してしばしば引用されるような文句を抜き書きしてみました。「人を殺したもの，地上で悪を働いたという理由もなく人を殺すものは，全人類を殺したのと同じである。人の生命を救うものは全人類の生命を救ったのと同じである（『クルアーン』第 5 章 32 節）」。同じく，「神に正義，公正さを堅持しなさい。たとえあなたがた自身や両親，近親のために不利になろうとも，富める者に対しても貧者に対しても。人を憎悪するあまりあなたがたは正義に反してはならない，正義を行いなさい（同 4 章 134 節）」。これらは，ムスリムにとって，人類に対する全般的な指針として了解されましょう。

諸宗教の共存の問題に関しては，非常に有名な一節「宗教に強制があってはならない（『クルアーン』第 2 章 256 節）」があります。それでは，強制しないでどうするのかというと，『クルアーン』によると，「だからあなたは説き諭しなさい，あなたにできることは説き諭すことだけです（同 88 章 21-22 節）」ということになります。「彼らに宗教を，信仰を強制することはできない（同箇所）」とも書かれています。あるいは，「叡智と良き諭しを以て汝の主の道へ導きなさい。最善の態度で彼らと議論

しなさい（同 16 章 125 節）」ともあります。

私は実は，これだけエジプトに長く暮らしていますが，イスラーム教徒ではありません。エジプト人ムスリムとも同居していましたから，皆は親しい友人である私が地獄に落ちるのを忍びないと思ったようです。あるとき，彼らは私のところへ説法を旨とする年配の人物を連れてきました。彼は厳しい顔で改宗を勧めてきました。暖簾に腕押しだったのですが，それ以上は何も出来ません。叡智をもって諭す以外ないわけですから。結局，残念そうな彼の後姿を見送りました。

逆に，ファーティマ朝という王朝の時代に，カリフのハーキム（1021 年没）という奇行と極端な禁令で知られる君主 ── 臣民にモロヘイヤを食すことを禁じるなど ── がおり，彼がコプトを弾圧する過程で一部強制改宗させたのですが，その君主が亡くなった後には，手続きを経てコプト・キリスト教徒に戻ったと史料は記しています。ちなみに，ハーキムは一方でコプト修道院の新築を認めるなど，弾圧の姿勢に一貫性はありませんでした。

ここで紹介した『クルアーン』の諸節は，比較的に他宗教に関して親和的，共存肯定的な部分です。これに相反するようなことを述べている部分もありますし，『クルアーン』のどの部分が強調されたか，あるいは優先的に人々の心をとらえたのかは，時代と地域によって振幅があり得ましょう。しかし，ここでは言葉尻をとらえるだけでなく，イスラームの全体像の中で，歴史と地域に目配りしつつ，錯綜とした要素を相互に照らし合わせながら考えることが，『聖書』においてと同様，重要なのだろうと思います。全体の論理の裡に個々の言葉をどう位置づけてゆくかという過程で，やはり一つ一つの言葉が意味を持つのでしょう。

このような共存が実際に見られた，としばしば説明に持ち出されるのは，オスマン帝国の時代です。「諸宗教の博物館」「キリスト教諸派の博物館」「プロテスタントの天国」「ユダヤ教徒安住の地」などという表現は，一時的にせよ，オスマン帝国において生じた共存の状況を説明するために用いられた表現です。ただ，本日はテーマ設定上から省略して，エジプトの事例のみお話しします。

エジプトでは，結婚のパレードやパーティーにコプトもムスリムも共に参列するという事例が歴史的にも，現在も見受けられます。また，ク

リスマスなど，コプトの祝祭における行列にムスリムも参加していました。史料によると，11 世紀のアレクサンドリアではキリスト教の棕櫚の主日に 2 つの教会間を市内行列する慣行があり，イスラーム教徒の住民も神の恩寵を確信して参加していました。これに投石して妨害しようとしたイスラーム教徒は，逆にムスリムのアレクサンドリア総督によって投獄されています。このように，ムスリムの支配者が非ムスリムを護れば共存はより容易となるのですが，そこが歪んでしまうと，社会は非ムスリムにとって非常に厳しいものになります。

そして，イスラーム教徒もキリスト教徒も同じ都市空間を共有して生活しているという意識，たとえばカイロのような都市にあっても，その「都市社会の共同構成者」という意識をもっていたと思います。君主の帰還や都市の祝祭に際しては一緒に飾りつけを行い，あるいは共に喪に服し，たとえば都市におけるインフラ整備事業には，キリスト教徒もムスリムも出て行って労働していました。

それゆえ，彼らが隣人として暮らしている事例には枚挙に遑がありません。キリスト教徒やユダヤ教徒とムスリムの間で結婚が生じていた背景には，隣人として見識っていた事実を指摘できましょう。あるキリスト教徒が死の床に病臥していたおりに，隣人のイスラーム教徒から送られたイスラームの信仰告白を記した紙片に導かれて改宗した，という逸話は幾つも残されています。

また，関連する別の逸話を読み上げます。「その（イスラーム教徒の）シャイフ（長老）のもとには猫がいた。彼はそれを秘かに飼っていたが，客人がその長老のもとに来ると，その人の数だけ鳴くようになった。そして，ある日客が来たとき，40 回鳴いた。シャイフが数えてみると 41 人いた。そこで猫の耳を引っぱり，〝どうして嘘をついたか〟と言った。すると猫は起き上がって，客の周囲を一人ずつ歩き回り，ある男のところのところまでやってくると，その男の頭の上に乗った。そして小用をたしてしまった。シャイフはその男を視て，キリスト教徒であることが判った。〝お前はこのようなふりをして，この皆と友人になっていたのか〟とシャイフは質（ただ）した。すると〝シャイフ様，私は…今日まで見破られたことはございませんでした。〟と言って，その後シャイフの手でムスリムへ改宗した」という話です。これはムスリムの参詣案内記に残っている話

です。キリスト教徒側からするとやり切れない話と言えるかもしれませんが，私がむしろ注目したいのは，普段から交流する現実があったのだ，という点です。

コプトの修道士の修道法も，イスラーム教徒のスーフィーの修道法に影響を与えた可能性があると私は考えています。加えて，ムスリムの聖墓参詣の仕方もキリスト教徒の真似が見られたと史料には明記されています。また，ここに一番典型的な例を書きましたけれども，キリスト教徒の祝祭日には，イスラーム教徒側も学校 ── イスラームの高等教育の場です ── を休みにしていたと史料にある。一部のムスリムの教師は，イスラーム教徒の子供たちからお金や贈り物を集めて，この祝祭で配っていたとあります。これはマムルーク朝期の共存についての実態の一面を良く物語っています。オスマン朝期に至っても，エジプトにおいて，この日常的な接触が継続して恒常的に妨げられるようなことはありませんでした。

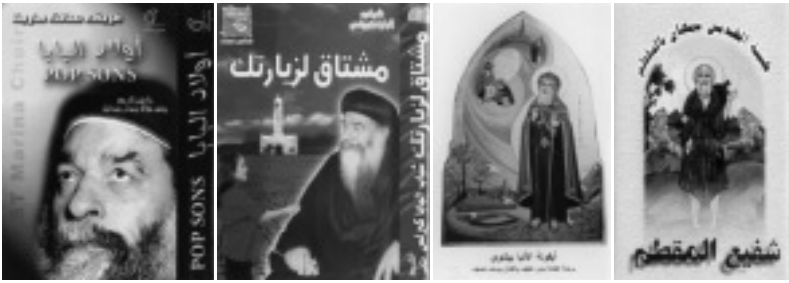
実はコプト・キリスト教徒も，これらの時代には非常に深くイスラーム教徒の影響を被っています。ここで指摘すること自体，非常に微妙な問題を含んでいますが，例えば，コプト・キリスト教徒の一部にはこの時代，一夫多妻がみられます。それから，イスラーム法の概念の一部を様々な場面で活用したりしています。そして，シャリーア(イスラーム)法廷は，キリスト教徒やユダヤ教徒にも常に利用されていました。とくに，キリスト教内の宗派を超えた問題や遺産の管理については，よくシャリーア法廷へ持ち込まれていました。

5．現代コプト社会の諸相

時間もあまり残っていませんので，現代の話へ移ります。現在，彼らコプト・キリスト教徒も，イスラーム教徒と等しく「エジプト国民」という意識を非常に強く持っていると思います。

コプトの教会や修道院などへ行くと，様々なグッズが販売されています。その中に，ここに示すようなカセット・テープもたくさんあります[写真５]。今，少しだけ流しますが，実に多様なものです。まず最初に，向かって右のものは，カイロにあるムカッタム山の仲介者こと，聖人スィ

写真 5



ムアーンを讃える歌です。これはウードを弾きながら歌う，非常にチープなつくりですが，彼を祀る山の教会で販売されていました。真ん中のものは，もう少し歌謡曲風で，この青い表紙のものをおかけしますが，これは，「あなた（様）の参詣に想い焦がれて」という歌です。ここで「あなた（様）」とは，先代の総主教であったキュリロス 6 世のことです。一番左側のものは，一見して「ポップ・ソングス」かと思って良く見たところ，「ポップ・サンズ」とあって，つまり総主教の息子たちのことでした。息子と言っても，あくまで精神的なものです。すなわち，この先代総主教を敬慕し，列聖したいという人たちが行う，様々な働きかけの一環と了解されます。

このキュリロス 6 世という先代の総主教は，現在でもコプトの人々の間に非常に人気が高いのですが，実は私が二軒目に住んでいた家の，斜向かいにある修道院の屋根裏部屋にお籠りしていた時期があります。彼はそこから日々，荒涼とした丘を登り，打ち捨てられた風車跡に庵を結び，修道していたのです。私が住んでいた 1980 年代には，その彼の死を悼む生誕祭に昼間行っても，パラパラとしか人がいなかったのですが，現在はこの写真［写真 6］に見るように，１週間におそらく数万人以上の人々がやってきます。人々は駅に近いこの教会で祈った後，トラックの荷台やマイクロ・バス，徒歩などによって，巡礼地と化した風車跡の遺構まで往復します。今まさに，ここで新しい聖人が創出されようとしている，その現場に立ち会っているという感興を覚えます。

それから，この鐘楼［写真 7］が見えると思いますが，これは，エジ

写真 6

写真 7

プトにおける今までの建築の暗黙のコードを破っています。何を言いたいかというと，ここでは近所のモスク尖塔よりもコプトの鐘楼のほうが断然高いのです。これはそれまであり得なかったことで，おそらくムバーラク政権の末期になって，こういう事例が許可されるようになってきたものと思われます。つまり，これは「革命」の成果ではなくて，その前から起っていることです。

コプトのメディアに関してみると，『ワタニー（わが祖国）』というコプトの新聞があります。1958 年創刊で，現在はインターネットでも部分的に閲覧可能です。一部の英語紙面も閲覧できます。「わが祖国」と称していることからもわかるように，コプト・キリスト教徒も祖国はエジプトだ，と主張していることになります。加えて，『カラーザ(福音)』［写真 8］という雑誌もあります。これは主として教会で配布されてきたものですが，こちらもインターネット上で見ることができます。この他，エジプトにはキリスト教系の書店が幾つもありますし，現在は何と言っても，複数あるコプト系の衛星放送チャンネルが重要です。

次に，イード(聖人の生誕祭，口語ではマウリドと称する)，これがやはり非常に大きな役割を果たしています。中でも，エジプトのデルタにあるミート・ダムスィースという小村には，数十万人（100 万人を超える

写真 8

という説もあり）という人たちが１週間に押し寄せます。私も幾度か参加していますが，聖ジョージを祀った教会と，川の対岸一帯が対象です。毎年，８月下旬に彼の生誕祭が行われます。

そこでは，様々なパッケージ化された宗教グッズが売られています。ありとあらゆるもの，Ｔシャツ，ノート，文房具，置物，絵葉書，聖人のイコン写真，アクセサリー，書籍，手帖から，飲食物であればコプト修道院産のワイン，蜂蜜，オリーブ油などが売られています。このような「もの」を通じて宗教的な情熱や知識，恩寵などを伝えていくという手法は，現在のエジプトではイスラームの方も盛んですが，そちらと双璧でしょう。そして，おそらくコプトの方が歴史的には先行していたかと推測されます。

そして，現在もムスリムとコプトの間に軋轢が生じています。その原因の大半は，一つにはコプトからムスリムへ改宗者が出て，それをめぐってトラブルが起きた事例。もう一つは，教会の建築・改築をめぐってのトラブルです。多くの問題がこの２点に集約されると考えられます。

上エジプトとは，カイロから見て南方を指し，ルクソールやアスワンなどがある地方です。こちらには，キリスト教徒の比率が，エジプトの平均よりも高いとみなされる地区が幾つもあります。それもあってか，トラブルが多く生じています。地区によっては，ほとんどがキリスト教徒の村や，キリスト教徒が経済的に優位に立っている村などもありますので，軋轢や暴動が助長されます。もちろん，アレキサンドリアや下エジプト，すなわちデルタ地域でもしばしば軋轢は生じています。

これまで，一定の世俗化を是とする軍事独裁政権であったムバーラク前大統領の政権は，これが自分たちの国の存続にかかわる重大な問題であるということを十分に認識して，ときに抑え込み，ときに利用してきました。私は，コプトとムスリムとの関係が，エジプトの国民統合における「へそ」のような問題だと常々申してきました。ムバーラク前政権は，ときに自作自演で軋轢を起こしてみせ，我々がいなくなったらイスラーム主義がエジプトを覆い，このような大変な事態になってしまいますよと国際的にアピールすることによって，自らの政権維持を図っていたことが，革命後さらに明らかになってきました。

そして，改宗の問題。コプトからムスリムへの改宗が，前述のように

庶民レベルでかなり頻繁に生じていて，その後の家族や共同体の対応は，しばしば深刻な社会問題を引き起しています。これについては，次に具体例でお話しします。

また，コプトは，海外へもネットワークを着実に拡大してきました。現在，コプトのことを語るのに，もうエジプト内だけでは不可能とすら言える状況です。例えば，イングランド，スコットランド，アイルランド，スウェーデン，ドイツ，フランス，オランダ，スイス，アメリカ合衆国(ハワイなど)，南アフリカなど色々なところにコプト教会があります。リビアやクウェートにもあるそうです。このように教会と信徒のネットワークが世界中に拡がっており，かつ多くの所へはエジプトから聖職者が派遣されています。

6．庶民街から

では，今度はカイロの庶民街から眺めてみましょう。私が住み通い続ける南オールド・カイロ地区で体験した話です。この家系図（図省略）では，仮名でアーテフとしていますが，私にとっての第3の親友を含む一族の系譜です。

様々な物語があるのですが，本日はそのごく一部だけお話します。私は，アーテフの父が死んだと，彼や周囲から聞いていました。そのため，死んだとばかりずっと思っていたのですが，あるとき，別のムスリムの友人から，彼の父親はムスリム女性と結婚するためにイスラーム教徒となって失踪してしまった，と聞いたのです。それが「死んだ」の本当の意味だったのです。現在，このようなケースでは，本当に死亡したのと同様，一切の関係を絶つ事例が多い。そのため，本当に父親不在の状態に陥ったのです。

よくコプト・キリスト教徒が「神に引き抜かれて」修道士になるという表現を聞きますが，このアーテフの父の場合は，コプトの共同体からムスリムの共同体へ引き抜かれていった。「引き抜かれた」という意味が全然違います。こういった民衆レベルの改宗が現在，庶民街では水面下でかなり多く進行しています。

その息子であるアーテフたちは，大変な辛酸を舐めました。父が若く

して去ったため，息子たちは進学をあきらめて，１日に３つの仕事を掛け持ちするなどして，妹たち弟たちの学資を稼ぎ，養ってきました。私も彼らのために，日本で上映会をやって資金を集めるなどしたことがあります。

そこへ1992年，エジプトで震度３の地震がありました。彼らの住むオールド・カイロの築100年以上の家も崩れ，住めなくなりました。そのため，ゴミ回収人（ザッバーリーン）の集落へと移っていった。マンシヤット・ナーセルという有名な地区です。ここのキリスト教徒は市内からゴミを回収してきて，分別後にその生ゴミで養豚をしていました。キリスト教徒ゆえ，彼ら自身には豚に対するタブーはありません。しかし，エジプトの養豚のさらに深刻な問題は，豚肉食をタブーとするイスラーム教徒でありながら，養豚をしている人が他の地区には一定数いたということです。ただ，数年前の通称「豚インフルエンザ問題」で ── エジプトでは「豚インフルエンザ」と呼んでいます ── エジプトは公称35

写真 9

万頭以上の豚を一応全滅させましたので，問題は違った位相へ移っています。ちなみにこの写真［写真 9］はマンシヤット・ナーセルの路上で豚の吊し切りをしているところですが，この豚肉を少しタレに漬け込み，串焼きにしたものを，豚のシシカバブと称して売っていました。世界中でも，豚肉のシシカバブを食べられるのはここだけだったのではないかと思います。現時点では，もちろん食べられませんが。

しかし，翌年，彼らの移住先，マンシヤで今度は大崖崩れがあって，100 人以上が死亡しました。それもあって，今度は先の地震の被災者住宅としてあてがわれた，はるかに遠い地区へと移って行きました。

このような経緯にもかかわらず，彼らは努力を重ね，サミーラという末妹は，最難関とされるカイロ大学まで卒業しています。その上のターレクも大卒後，エンジニアとして成功し，高校の教職と兼業しながらお金を稼いでいた。順風満帆かと思っていたところ，このターレクは，共同名義となっていた会社の社長に資金を全額持ち逃げされ，その共同責任者として投獄されそうになりました。日本まで国際電話で助けを求めてきたので，私も保釈金の多くを支払ったのですが，そのときのショックでお母さんが亡くなりました。

彼らは父親が改宗したため，様々な場面で苦労してきました。例えば，彼らが結婚しようとすると，相手の一家に，「あなたのお父さんのことを知った。だから…（あなたもそうならないとも限らない）」などと言われ，破談になったケースも何回かありました。このようにコプト社会の中で非常に厳しい立場におかれつつも，苦労しながら面倒を見てきた末妹のサミーラが，何と今度は，イスラーム教徒のカイロ大学同級生と結婚して，イスラーム教徒となってしまった。これはもう苦難の極限だったと思います。兄弟たちは，私の面前で泣いていました。どうしてわかってくれなかったのか，と。そして，やはりサミーラと絶交していくことになります。そこにはコプト社会の問題，ムスリム社会の問題，双方の深刻な問題が潜んでいると思われます。

7．エジプト 1 月 25 日革命

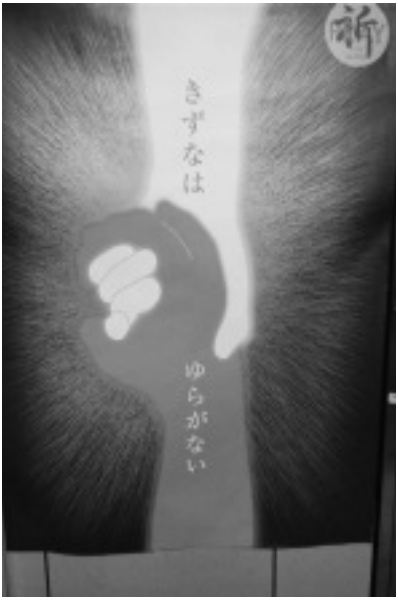
エジプトでは，2011 年 1 月 25 日に起ったことを「1 月 25 日革命」と

写真 10

称しています。ですから，この後ここでは「革命」と仮に呼ばせていただきます。ここで図像［写真 10］を見ていただきたいのですが，向かって左側は，コプトとムスリムが一つの手となってつながっている絵です。この「一つの手」というのは，今回の革命で様々な局面で使用され，非常に重要なスローガンの一つになった。例えばキリスト教徒とムスリムが一つの手。そして，軍と民衆も一つの手。色々なものが一つになったという感覚が共有され，瞬間的には，エジプトへの愛国心の高揚も相俟って，融和的な関係が現出したのです。ただ，それがどこまで続くかは，また別に考える必要があるでしょう。

ちなみに，こちらは震災後に日本で出たポスターです［写真 11］。こちらは日本の中の絆が揺らがない，と言っています。しかし，実際には日本の方もコプトの方も（マスペロ事件など），絆が様々なところで揺らぎつつあります。ただし，私は 1 月 25 日革命後のエジプトで起っていること，そして日本で「3・11」後に起っていることは，様々な要素におい

写真 11



て共に弦が打ち震えるような関係，共振するような関係にある，と表現してきました。そこには，直接日本とエジプトとの関連で，日本が影響を受けているような次元と，世界中でグローバルに生じている事柄が両国に波及している次元と，双方を指摘できると私は考えています。前者についていえば，今回のエジプト革命の磁場となったタハリール広場での出来事は，米国の「ウォール街を占拠せよ」運動だけでなく，日本へもいろいろ影響を与えていて，現在日本で行われている反原発のデモ，たとえば新宿，高円寺，渋谷とか京都，こういうものはタハリール広場の再現を意図していることが公言されています。

去る 3 月 11 日，つまり日本で大震災があったまさにその瞬間，私はタハリール広場に居合わせました。これはその 3 月 11 日にタハリール広場で撮ったものです [写真 12]。この 3 月 11 日はキリスト教徒とムスリムの融和を呼びかけるデモが主流でした。ここにお聞かせするのは，そのとき，広場に出ていた歌手による歌です。

写真 12

写真 13

今回のエジプト「革命」は，様々な次元で語ることができると思いますが，例えば，携帯電話や，フェイスブック，ツイッターを含むソーシャル・ネットワーキング・サービスを使って，若者たちが非常に大きな役割を果たしたと言われています。携帯電話や SNS がなかったら，この時期にこのような形では起らなかった革命であることは，まず間違いないと思います。革命の最も重要な仕掛人の一人である「4 月 6 日運動」リーダーのアフマド・マーヘル氏も，同様の意見を私に表明してくれました。

そのような若者たちによるインターネットの世界で，やや行き過ぎたような話もあります。これは革命の混乱の中で副大統領になったオマル・スレイマーンという人物の写真［写真 13］ですが，その後ろで異様に目をぎらつかせている男がいました。そして，ネット上でこの男は誰だ，と話題になり，この男が怪しい，ムバーラク大統領をかくまっている，などと噂になりました。さらには，この人物をパロディーにした歌まで作られているのです。結局，この人物の親族が名乗り出たため，彼が高位の軍人と判明し，その，ネットユーザーたちがみんな謝罪した，という一件すら起きました。そのように，独特な「ノリ」が見られた革命です。

その中には，コプトとムスリムの協働というテーマも見られました。この写真が，見えますでしょうか[写真 14]。大変有名になった写真ですが，コプトの十字架を持っている人，こちらがコプトの象徴です。向こう側の人は『クルアーン（コーラン)』を持っています。『クルアーン』を持つムスリムと，十字架を持つコプトが，共に革命を闘った，という側面を象徴するものとして一番よく使われる図像です。後になって，かなり演出的な意図があったと聞きましたが，それはともかく，国内外に最もインパクトを与えた図像の一つでしょう。

実はコプトの総主教シュヌーダ 3 世は，コプトの革命参加に対して最後まで躊躇しており，少なくとも途中までは，参加しないよう呼びかけ

写真 14

写真 15

ていました。ところが，若い人たちはそれに納得せず，当初から革命のデモに加わって行ったという現実があります。

それに関連して，これも非常に有名な一件です。タハリール広場を占拠しているときに礼拝時間となり，イスラーム教徒たちが無防備で礼拝している間，それをキリスト教徒たちが輪になって守ってあげた，という有名なものです[写真 15]。これはやはり，現地のムスリム社会や欧米などで大反響を呼び，コプトもいい奴らだ，あいつらも俺たちの仲間だ，というムスリム側の反応が多く聞かれたものです。

そしてまた，タハリール広場には，女性たちがテントを張って泊り込んだり，家族連れも多数やってくる。ここで結婚式をやった人もいますし，アーティストたちが各種のアートを繰り出し，ペインティングをやる，歌手も次々とやってきて歌う，詩人は詩を詠む，映画監督は作品を撮る。その周囲にはボランティアで医療チームが展開し，あるいは差し入れによって共食する。このように，創造的であり，かつ社会的な抑圧から自由な場所が瞬間的に誕生しました。

ファッションや鬚など人々の風貌にも影響は見られました。現在のエジプトで，イスラーム教徒の女性がしばしば頭を覆う，ヒジャーブという髪覆いがあります。これは『ヒジャーブ』という髪覆いのファッション雑誌ですが，革命後には髪覆いの革命ファッション特集号まで出ていました［写真 16]。

写真 16

1 月 25 日革命では，少なくとも瞬間的には，非常に融和的な状況が生まれたと言いました。しかし，そうなると，それを壊そうとする人々が出てきます。とくにムバーラク前政権の残党勢力，彼らはどこをつついたらエジプト社会が混乱するかということをよく心得ています。いわばエジプト社会の「へそ」にあたる部分はコプトとムスリムの問題だということをよく知っていますので，そこを狙ってきます。一部明らかになっているケースでは，旧政権側が教会を破壊したりしている。そして，イスラームの過激派を煽るなどしたとされる事例もあります。

一方で，キリスト教徒も比較的穏健なイスラーム主義勢力として知られるムスリム同胞団の結成した自由公正党の副代表になったりしています。ラフィーク・ハビーブという人物がそれです。このように，様々なかたちで今 (2011 年 10 月)，政治勢力の組み換え，編み直しが起こっているところです。今後，革命後の各種選挙において，一定の投票傾向を見せがちなコプト勢力は，キャスティング・ボートを握ったり，投票結

果の責任を押しつけられたりする可能性があります。

8．ビデオでみるコプトの聖人生誕祭と結婚式

以下は，私の撮りためたビデオを見ながらご説明しましょう。最初にお見せするのはナイル河の中洲ですが，オールド・カイロにザハブ島という小島があります。シルエットを見ていただくと，教会の鐘楼とモスクのミナレット（尖塔）が並び建っているのがわかると思います。当初，エジプトのほほえましい光景としか私には考えが及ばなかったのですが，改めて考えてみると，これほど両者が隣接しているということは，キリスト教会が先に建てられ，その後にモスクが建設されたということを如実に示しています。つまり，これは恐らくキリスト教徒の方が同所へ最初に入植するに当たって，はるかに優勢であったということを示しているのでしょう。そして，このように両者が接近している場合は，この建設の順序が逆転することは，原則として近年までなかったと思われます。このように，教会とモスクが，モスクの塔の方が若干高く並んでいるというような光景を，エジプトでは非常に多く見かけます。

次に，教会での聖人生誕祭の動画をお見せしますが，最初のものは，マリーナという聖女のものです。これは，先述のイスラミック・カイロに在る，イスラームのエジプト総本山であるアズハル学院・モスクの真裏に位置する，彼女を祀る教会で執り行われます。例年，12 月に行われるもので，最初に，式次第の説明が行われているところです。私は当日に許可をとって撮影して，この映像のコピーを教会に差し上げています。朝 9 時 40 分くらいから始まりましたが，このハイカルという木枠で囲われた聖域の奥で，式は厳粛に執り行われます。一般信徒は，この手前に男女別れて座ります。この教会自体も非常に古いものだといわれています。

これは，願い文を入れた封筒を回収しているところで，そこへお布施も同封しています。そして，まとめて式の台上に置かれ，聖職者に式典を通じて祈祷してもらうことになります。教会の典礼で使われている言語は，アラビア語とコプト語ですが，アラビア語の方が大勢を占めています。コプト語の場合は，意味はわからずとも，皆で唱和します。列席

者はほとんどがキリスト教徒ですが，病治しや祈願のために，ムスリムが来ることもあります。

これはその木枠の内側で行われている儀礼です。聖職者が交替でこのように祈祷してゆきますが，それが象徴するところを別とすれば，実践される行為は，一連の祈祷の中でこのパンをちぎって解体し，再度復元するということに過ぎません。しかし，その間に様々な祈祷や躓拝が行われます。

こちらの香は，きわめて重要な役割を果たします。コプトの生誕祭では香が焚かれないということは考えられません。この小シンバルを叩く人は盲目で，そのような人に働く機会を与えるのだ，という説明を受けました。中にはもう，感極まって泣き崩れている聖職者もいます。特に，この教会には聖女マリーナの手のミイラとされる骨が祀られています。皆，そのご聖体に触れて奇蹟にあやかりたいと願っています。特に病治しですが，車椅子でやってきた座ったきりの人が立てるようになったとか，その種の奇蹟を求めて到来します。

ここで配られているパンは，こちらで焼いたものです。そして，この木櫃に納められているのがご聖体です。これを年に一度開陳して，香水などで清めたうえ綺麗に拭きます。さらに，これを掲げて行進します。ここでは式典に，ワインではなく，バラ水が使われます。バラの芳香のついた，ピンク色の水です。最後はこのバラ水を小バケツに汲んで，皆に振りかけます。

ここ迄で当日のビデオ録画は数時間経過していますが，これはそれぞれが帰宅してゆくところです。実はこの日，車椅子の女性が一人来ていたのですが ── この女性です ──，結局奇蹟は起こらず，そのまま帰っていきました。しかし，数年前にはやはり，こういう参加者が立った，と聞きました。

これはこのあとに続くものですが，十字架とご聖体を掲げて行進するためのコース取りや態度について，説明をしているところです。ご聖水もかけています。この別の人物は，人気の高い聖職者ですが，みな彼の手に接吻しようとするなどして，恩寵を分け与えてもらいたいと思っています。

教会の外には，入口の脇や参道に様々な出店があります。これはその

中で，手首に十字架を彫る刺青師です。少し前までは手彫りだったのですが，現在は電動式です。これは 1992 年に撮影したもので，この当時の値段でいうとだいたい 30 円くらいの対価で彫っています。この彫られている人もおそらく初めてではなく，2 個目の十字架か，あるいは薄くなってきたのでもう 1 度，ということだと思います。性別に関係なく，子供も彫ります。中には足首や他の箇所に彫る人もいます。こちらは記念品を販売する障害者の人たちです。これは別の女性ですが，肘の内側に十字を彫っているところです。周囲の人々は，とっても綺麗よ，などと励ましています。

こちらはまた別の，私が住んでいたオールド・カイロの地区にある由緒ある教会，アブー・サイフィーン修道院での生誕祭の模様です。ここも男女に居場所が分かれていましたが，大混雑でもう区別がはっきりしなくなってきています。ここはもう，片手でビデオ・カメラを掲げて撮らなければならないほどでした。

木枠の向こう側で式次第が行われています。こちらも 12 月ですが，凄い熱気で，気分が悪くなる人や，倒れる人も沢山いました。しかし，そうまでしても，この年に一回のお祝いに参列したいのです。このような生誕祭が多くの教会で執り行なわれますので，大変な数に上ります。

ビデオの最後に，ほんのわずかですが，コプトの友人の行った結婚式の模様をお目にかけます。これはカイロの中心街（アブディーン地区）の教会で行われたもので，正式に結婚の書類にサインする場面です。これ以外に披露宴に当たるものを自宅や，ホテルのようなところで行うことがしばしばあります。その場合は，歌あり踊りありですが，この場は教会であって，きわめて厳粛な雰囲気の中で行われています。

さて，新郎新婦が車で周辺を回ったのち，教会へやってきました。この二人は，先ほどご紹介したゴミ回収人たちの地区，マンシヤット・ナーセルでのボランティア活動を通じて知り合いました。新婦は現在小児科医として活躍し，新郎のほうは税務署に勤めつつ会計士を兼職しています。挙式の教会は自分たちで選択しましたが，ここは彼の方の住所に近く，平素よりこの教会を良く知っていました。さらに，今回は別の教会からも，知己の司祭を呼んでいます。この人物は，シュヌーダ 3 世の総主教後継候補の一人と目されています。

この結婚式は全体でやはり，2，3時間を超す長いものですから ── それを数分にまとめてありますが ──，手伝いをする子供たちがもう疲れ果てている様子が窺えます。この子は一度もう限界と訴えたのですが，年配の人たちに励まされて，何とか任務を完遂できました。

9．おわりに

ビデオはこれくらいにして，まとめましょう。前近代を見る場合，(一神教徒)共存の枠組みを宗教の制度として唯一育んできたのは，イスラームではないかと思っています。その枠組みは現在の基準からすると差別的な内容をも含んでいましょう。それでもなお，前近代にあっては，稀有であったと言えます。

たとえば，ロシア帝国の一部であったり，キリスト教のいわゆる「レコンキスタ」後のスペインの一時期であったり，そういう条件下にイスラーム教徒が政策的見地から保護されたことはあるでしょうが，その宗教的背景をなす制度が形成されて機能したようには思われません。あるいは中国における清朝の時代のように，宗教的な違い，たとえばイスラーム教徒に対して，結果としてある意味で寛容，あるいは放任というような時期がありましたが，それは制度，とくに宗教のもとで構築された制度に基づくものではないようです。時系列的に考えれば，ユダヤ教，キリスト教の後にイスラームが出て来ているわけですから，ある意味では当然なのかもしれません。

しかしながら，前近代においてイスラームが育んできた寛容のシステムが，そのままの形で現代にも有効に機能すると楽観してはおれません。この前近代において示した寛容の優位に，やはりイスラームも甘んじてはいられないように感じます。例えば，ヨーロッパにおいては，「近代」や20世紀半ばのユダヤ人大虐殺という痛切な経験を経て，他者を国民として包摂しようとする試みが続いてきたと思います。もちろん近年になって，ヨーロッパでムスリム移民の排斥などが続き，今後の展開は予断を許しませんが。

イスラームについて言えば，過去のその共存のシステム ── これは歴史をかけておおよそ「中世」頃に確立した一連の非ムスリムに対する規

制を含む「ウマルの誓約」に象徴的に集約され，ムスリムと非ムスリムとの関係を規定しようとするシステムですが――，その弾力的な応用によって，今後も対処できるという考え方もあることでしょう。ただ，それは現在の世界にそのままの形で活かすにはかなり困難があるように思われます。19 世紀半ばに人頭税を廃したときに，そのことはある程度意識されていたのかも知れません。このような建前の制度とは別に，この講演で述べてきたように，イスラームの大枠のもと，彼らは本当に隣人として暮らしてきました。地域社会も共に構成し，ときに婚姻したり改宗したりしてきました。そのような日常を営んできた部分の歴史を，エジプト社会は誇り得るわけです。そして何より，曲がりなりにも，千年以上にわたって共存してきた歴史の重みは否定できません。

イスラームの初期から中世，現代へと綿々と受け継がれてきた，日常生活や地域社会を共有することによる，エジプト社会の共存の慣行，これらの経験を真の平等や共存へと生かす方法がないものか，と想いを馳せます。また，それらが革命で新たな息吹を吹き込まれ，再編されつつある地域コミュニティーの共有をベースに，新しいかたちでイスラームともうまく嚙み合った形でつながり，ムスリムと非ムスリムの未来を紡いでいってもらえれば，とも願っています。われわれは，その端緒のようなものをこのタハリール広場において，革命において，瞬間的に垣間見ることができたのでしょうか。絶望的な事件も多いなか，現実世界において積み上げられてきた経験と叡智を活かす知恵を求めて，私の夢想は続いています。

長くなりましたが，ご静聴ありがとうございました。

＊本講演は，2011 年 10 月 1 日に札幌の藤女子大学で行なわれました。渡邉浩先生をはじめ，今回の講演機会を与えて下さった関係者の皆様に改めて感謝申し上げます。北海道で，そしてかつての同級生も通ったであろう藤女子大学でお話できるという幸運に，心から感謝致します。